

松島齊先生のご退職にあたって¹

小田原 悠朗²

2026年4月

平成 28 年卒の小田原と申します。経済学部在学中、松島ゼミのゼミ長を務めました。松島先生の退職記念に寄稿の機会をいただくのは身に余ることですが、私なりに感じてきた先生の魅力をお伝えできればと思い、先生にいただいたスワローズグッズを眺めつつ、筆を執りました。

松島先生の研究者としての歩みを振り返ると、その出発点からすでに並々ならぬものを感じます。先生が東京大学大学院で博士号を取得されたのは 1988 年のことです。当時、東大の経済学研究科で博士号を取得する例は極めて稀であり、また、いまのように国際的な研究交流が容易な時代でもありませんでした。その中で先生は、ゲーム理論を用いて社会選択理論のルールのひとつが実行可能になることを世界で初めて示すという、圧倒的な博士論文を書き上げられました。その評判は海を越え、Dilip Abreu 氏との共同研究へとつながり、メカニズムデザインの研究者であれば誰もが知る「Abreu-Matsushima Mechanism」が完成しました。この研究は経済学の最高峰の学術誌である *Econometrica* に掲載されています。

その後も先生は、*Econometrica* や *Journal of Economic Theory* をはじめとするトップジャーナルに、次々と成果を発表されています。正直に言えば、先生があまりにも頻繁に *Journal of Economic Theory* に論文を掲載されるので、学生だった頃の私はその業績の凄みを十分に理解できていませんでした。自分自身が投稿を考える段になって初めて、常人には一本通すことすら非常に難しい雑誌であることを知り、先生の業績の桁外れさに愕然としたのです。

こうした功績により、先生は 2003 年に *The Econometric Society* の Fellow に選出され、2004 年には日本経済学会の中原賞を受賞されています。長年の盟友である神取道宏先生は、松島先生を、類まれな発想力と数理力に裏打ちされた「不可能を可能にする男」と評しておられます。

松島先生と初めてお目にかかったのは、学部三年のゼミ説明会でした。大学教授の研究室に足を踏み入れること自体が初めてでしたが、それが松島先生の部屋だったこともあり、「大学の先生はこういう空間で思考を巡らせているのか」と強く印象づけられました。会話の端々に

¹ 本稿は、東京大学経友会会誌『経友』への寄稿をもとに加筆修正したものです。

² 東京大学マーケットデザインセンター特任研究員／2014・2015 年度松島ゼミ生

表れる思考の切れ味と教養、そしてユーモアに惹かれ、私にとって松島先生は、知的な迫力と遊び心を併せ持つ、まさに憧れていた『大学の先生』そのものでした。

実際に入った松島ゼミでの日々も、その印象を裏切るものではありませんでした。毎回のゼミでは、脱線を重ねながら議論が深まっていきました。「話し始めたら終わらない」時間がとにかく楽しかったことをよく覚えています。

松島ゼミの思い出としてもう一つ、先生のゼミ生思いな一面をご紹介させてください。日本評論社から刊行された神取先生の名著『ミクロ経済学の力』のパロディとして、私たちゼミ生が松島ゼミの思い出を込めた『メカニズムデザインの力』T シャツを作り、松島先生に贈りました。先生がそれを研究室に飾ってくださっただけでもうれしかったのですが、後に日本評論社のインタビュー記事³中の写真にその T シャツが大きく写っているのを見たときには、まさかそこまで大切にしてくださっていたのかと、ゼミ生の一人として本当に嬉しく思いました。

私が研究の世界から少し距離を置いていた時期にも、先生は折に触れて気にかけてくださいました。あるときは先生の好きなスワローズや、私の好きなバイスターズの話でふとメールをくださることもあり、そうした何気ないやり取りにも、先生の温かさを感じていました。

ここからは、私自身が松島先生の仕事をどう理解してきたかについて書かせてください。率直に言えば、それは何度も更新されてきた理解の物語です。

学生の頃、私が先生に抱いていた憧れは「数理の力」に対するものでした。精緻な定理、鮮やかな証明、隙のないモデル構築。そうした技術的な卓越性こそが先生の研究の核心であり、自分もいつか、あのよう美しい論文を書けるようになりたいと思っていました。

その憧れを決定的なものにした出来事があります。卒業論文に行き詰まっていたとき、先生がふと「例えばこれとこれの掛け算で、何か面白いことはできないのか」と声をかけてくださいました。そこから考え続けた末に、自分でも驚くほどきれいな定理にたどり着くことができました。卒論発表の際、先生は驚いて褒めてくださいましたが、今にして思えば、あの一言の時点で、先生はその方向に実りがあると見抜いておられたのではないかという気がします。私にとって、それは先生の発想力の大きさを身をもって知った忘れがたい経験でした。

ただ、後になって思えば、それは先生の偉大さの入口にすぎませんでした。そのことに最初に気づかせてくれたのが、先生のご著書『ゲーム理論はアート』でした。この本を拝読したとき、先生が数理モデルの先に見ておられるものは、自分が思っていたものと少し違うのではないか、という感覚を抱きました。ただ、その時点では、まだうまく言葉にできなかったように思います。

その感覚がはっきりしたのは、私が学術的な知見を企業等に実装していく仕事に携わるようになってからでした。理論的に正しい仕組みを提案しても、それだけで制度が動くわけではありません。制度上の技術的な利点をいくら丁寧に説明しても、それだけでは相手に届かない場面

³ <https://www.carf.e.u-tokyo.ac.jp/news/post-1324/>

に何度も直面しました。そうした現実の中で、「では、この制度はどうあるべきなのか」という問いに立ち返るたび、思い出したのが松島先生の仕事でした。

改めて先生の論文を読み返すと、かつて私が数理的技巧だと感嘆していたものの背後に、より根本的なものがあると気づきます。先生の研究は、まず「制度は人々のためにどうあるべきか」という問いから始まっていたのだと思います。理念や規範的なビジョンが先にあり、数理はそれを厳密に語るための言葉として用いられているのです。私は長いあいだ、その道具立ての見事さに目を奪われていましたが、実務を経て、先生の仕事の見え方が少し変わったように思います。

そうして先生の仕事の一面を理解し始めたとき、ゼミ合宿中に、松島先生の師である宇沢弘文先生の訃報が届いた際のことを思い出しました。普段の飄々としてお茶目な姿とは異なる、しんみりとした口調で宇沢先生との思い出を語られる姿が、強く印象に残っています。並々ならぬ研究者人生を始められるまでに先生がどのようなことを考えられていたのか、そしてその後どのようなことを大切に研究されてきたのかを知ることができた機会でした。先生が『経済セミナー』2015年2・3月号に寄稿された「宇沢弘文先生とわが大学生時代」は、ぜひ多くの方に読んでいただきたい名文です。

宇沢先生の志を継ぐように、松島先生は社会的共通資本をめぐる思索を深め、さらに近年は「制度信託」という主題に取り組んでおられます。制度をどれほど論理的に整えて設計できるかという以前に、そもそもその制度が人々から信託され、支えられるものでなければならない。そこにはさらに根本的な問いが据えられています。振り返れば、私の修士論文のテーマも制度信託に関わる内容でした。当時は明確に自覚していませんでしたが、先生の教えを受ける中で、先生が大切にされている価値観を自然に受け取っていたのかもしれない。

AIの発展によって、論理的思考の技法それ自体は以前より広く手の届くものになったようにも見えますが、現実の政治や社会は、今なお価値観や立場の違いに大きく左右されます。そうした時代に、制度の正しさを数理的に語るだけでなく、その制度が人々の信頼に値するとはどういうことか、ひいては経済学者が人々からの信頼を勝ち取って貢献するためには何が必要かを真正面から問う先生の問題意識は、ますます重要になっているように思われます。

松島先生の最終講義のタイトルは「経済学の死と生」でした。この題目を伺ったとき、私は最後にどんな松島節が飛び出すのかと、大いにわくわくする一方で、少し身構えてもいました。しかし、それは経済学の意義を否定する言葉ではありませんでした。ここでいう「死」は限界の自覚であり、「生」はそれに対する再定義の試みです。先生はゲーム理論の研究を通じて、何度も「理論は美しい、しかし何か足りない」と感じてこられたそうです。その中で、先生がどのように経済学に「生」を与えてこられたのか。その研究者人生の全体像に、改めて圧倒されました。先生のご退職にあたっては、神取先生、そして私と同じく松島門下生である野田俊也先生が、松島先生の業績を解説される機会もありました。先生ご自身のご説明も含め、三者三様にその魅力が語られる様子は、同じ数理的理論を扱っているとは思えないほど切り口が異なり、そ

れぞれに研究の偉大さ、深遠さを感じさせるものでした。それはまるで往年の名画について語るのを聞いているようで、優れた研究とは、読み手や聞き手によって異なる魅力が引き出されるものなのだと、改めて感じました。

ゲーム理論の精緻な世界から、人々が共に生きるための基盤そのものへ。先生の歩みを拝見するたびに、自分が見ていた松島先生の仕事は、まだその一部にすぎなかったのだと感じます。

学生時代の私は、先生の数理に触れて憧れました。やがて先生の理念を知って敬服するようになりました。そして今、また新しい問いに向かわれる先生の歩みを前にして、自分がその仕事の凄みを本当に理解したと言える日は、たぶん簡単には来ないのだろうと思っています。先生を追いかけるたびに、それまで見えていなかったものが少しずつ見えてくる。そのたびに、自分自身がどこまで成長できているのかも問われている気がします。

2026年4月から、松島先生は活躍の舞台を東京大学国際高等研究所 東京カレッジへ移されます。引き続き東京大学でその頭脳と熱意を発揮されることに感謝しつつ、今後ますますのご活躍を楽しみにしております。

松島先生、経済学研究科でのご活躍、本当にお疲れさまでした。これまで時間を気にせず延々と議論し続けてくださった時間は、私にとって一生の宝物です。また神宮球場でビールを飲みながら、野球談義に花を咲かせましょう。